りれー随筆 103

われ助産道を行く

賀久 はつ
むなかた助産院(福岡県)

オランウータンのようなピーナツ

九州の宗像市に住むようになって30年,故郷の千葉で暮らした年月を5年も越えました。私の性格はオランウータンそっくりですからなじんだ所への愛着が強く,九州行きの結婚にもなかなかふり向けずにおりましたのに,何か,天命めいたものを感じてそれに従い,九州にきました。

オランウータンはいったん仲間と手を結んだら自ら離れることはありません。相手が勝手に離れると長期にわたって号泣するといわれますが,私もいっしょに仕事をした仲間が去った時は,髪の毛が細くなる程胸を痛めたものです。

国立公衆衛生院時代,恩師の勝島喜美先生から「味のあるピーナツ」の渾名(あだな)をいただいておりましたが,誰ひとり頼る人のない西の地にきて,ひっそりとささやかな仕事をしている私を嚙みしめて,味を引き出してくださった方が浅生慶子先生でした。先生はさりげなく学生指導や講演などの会をつくっては私の成長を助けてくださいました。ほんとに粋な教育者とご尊敬申しあげます。

2人の息子が看板

当時の宗像市は,母子保健には手つかずの状態でしたから,くる日もくる日も砂漠にじょうろで水をまくような思いがつづきました。そんな中で1人2人と熱意ある産婦と家族にめぐり合いました。私はこうした出合いを教科書としてまいりましたから,どの先生について習うということは一回もありませんでした。

わが家の夫婦関係は日本的(夫が勝手に,男は偉い,男は社長と思っているに過ぎないのですが)でも,母子関係はかなりアメリカ的なところが多く,胎児期より1人の人間として尊重し,自分のこころに恥じない生き方をするようにと,厳しく教えました。

息子たちの自立も早く,小学校卒業を前にして,「進学・勉強は何のため?」という先生の質問に対して,友人はみな「よい大学を出てよい会社に入って……」と答えるのに,長男は「よい家庭をつくるため」と答えておりました。さすが助産婦の子,母の仕事をよく理解していると驚きました。

十歳をかぞえるわが子よ人となりて
ゆけ汝が道と汝がこころもて
汝が道はあまたにあれば大志もて
山河をかけて海を渡らむ

このように精いっぱいの母の愛を傾けておりましたが,長男が思いがけず京都に就職し,年とともに日本的な母のさびしさを味わうようになりました。

去りし子よ達者であれと紅梅に
今日も語りて白水やりぬ

助産婦としての私を育てたことば,それは長男が3歳の時に言った,「世の中でいちばん大切なものは赤ちゃんのいのちでしょ。ぼくが風邪でもお母さんは(お産に)とんでいくもの。いかないと死んでしまうんでしょ」というものでした。これを聞いて私は絶対に仕事において失敗できないと思いました。

また,少しおっとりとして,発育が遅れていると思っていた次男が,小学校3年生の時,先生から「宝物を見せて」といわれたときに「ぼくの宝物はお母さんです」ときっぱりいい切り,私は思わず床に額をつけて詫びました。

© IGAKU-SHOIN Ltd, 2013

2026/09/25 01:24:18

宝物はわが母なりと云いし子に
　なしたるわざをかぞえれど乏しき

こうして私は2人の息子によってすすむべき方向をしっかり見つめることができました。

両陛下のこと

昭和60年に私は母子保健奨励賞をいただき，東宮御所で両陛下(当時皇太子ご夫妻)よりおことばをいただきました。

陛下のあたたかかったこと，美智子様のお美しかったこと。すべての分野の人々を尊重され，よくここまでご研究なされたと驚くほどに，輝やきの眼差しでご質問なさっていました。北の受賞者から順々におことばをいただきますので，九州の私は最後でしたから，お待ちする間に名刺の裏に和歌を記しておきました。

母と子の守りとなりて歩みゆかん
　尊き方の御(み)こころを得て

お2人が私の前にお立ちになられた時，私は視線を両陛下の足もとに落としたまま，「本日の気持ちでございます」といって名刺に書いた和歌をお見せいたしました。すると美智子様は「あら，それをください」とおっしゃって名刺をおとりになりました。

御所を退出いたしますと審査委員長の小林登先生から「賀久さん，美智子さんに何かお渡ししましたね」と声をかけられ，私はとっさに「いいえあちらからおとりになられました」と申しましたら，一同大笑いになりました。

一般の者から物をさしあげることはできないのですが，美智子様は地方へお出になられた折にさし出された子どもたちの作品などを大切に保管なされていらっしゃると伺いました。

「宗像の母」として

10歳の時，地域で働く助産婦をみて，「大人はあのように頼れる存在でなければならない，自分も大人になったら頼られる人でありたい」そう思ったものですが，40代の半ばになってどうやらそれに近づいているのに気づきました。そして私の理想とする助産婦像は，地域の母でした。

昨年，作家の島一春氏が『山河に愛ありて』の本に私のことを書いてくださいましたが，島氏は取材にこられた時，「あんたは他の助産婦とちがうねえ。北から南までたくさんの助産婦に会ってきたが，みんな母親の数段上で命令したり，自分の方へ引っぱっていた。あんたはいつも母親と同レベルに自分を置いている」とのこと。当りまえなのに……とも思いました。

この本が出版された後，読者から「こんな助産婦が増えたら出生率が向上すると思う」との感想が島氏のもとに寄せられたそうです。

助産婦の仕事は，年とともにやりがい，生きがい，居がい(新語ですみません)と変化してくるものですが，私もそばにいるだけで安心して産める，といわれる年ごろになりました。

何はともあれ，三世代，時には四世代の人間模様を同時に勉強させていただける助産婦の仕事，何と素晴らしいんでしょう。

＊　　＊　　＊

次は，母校の千葉大助産婦学校を通りぬけて一足飛びに，北海道立衛生学院で教鞭をとる，ゴムまりのような伊藤千栄子先生にお願いいたします。

2026/09/25 01:24:18